

聖書:ルカの福音書7章1～17節

説教:信仰とはなにか

はじめに

教会は、イエス・キリストを信じますと告白する者、あるいは信じたいと願う者が集まるところです。では、「信じるとはなんですか、信仰とはなんですか」と問われたとして、どう答えたらよいでしょう。意外に難しいかもしれません。普段何気なく使っている「信仰」ということばですが、どうということなのか改めて考えてまいります。

1 一つのこととして考える

1) ナアマン將軍とシドンのツアレファテの女(4章25～27節)

そこで今日のところを見ていくのですが、週報のアウトラインに、「ナアマン將軍とシドンのツアレファテの女」と書いてあって、これはいったい何のことかと不思議に思っただけかもしれませんが、そのことから説明します。

少し戻ってルカの福音書4章16節以降に書かれていることです。イエスがご自分の故郷のナザレに戻ったときのことです。奇蹟を見られるのではと期待して会堂に集まってきた村人たちに、イエスが預言者エリヤとエリシャの名前を挙げて説明するくだりがあります。

エリヤは、イスラエルに大飢饉が起きたとき、エリヤはイスラエルにたくさんのやもめがいたのに、外国人のやもめの女のところに遣わされ、やもめの一人息子が病気で死んだとき、エリヤがこの子どもをよみがえらせて母親に返した。そういうことがありました。

またエリヤの後継者となったエリシャは、アラムという外国の將軍であったナアマンがツアラアトで苦しんでいたとき、ほかにもたくさんの病人がいたのに彼だけをいやした。イエスは、この二人の預言者の名を挙げながら、「自分も故郷では歓迎されない」と説明された。それが4章に書かれていることでした。

2) 百人隊長と息子をなくしたやもめ

それと今日の箇所、何の関係があるのか。よく見ると共通点があります。2節に登場する百人隊長は、イスラエル国内に駐屯するローマ軍の指揮官、つまり外国の軍人です。この隊長の部下が病気で死にかけているとき、イエスにお願いしたらいやされていった。ナアマン將軍も外国の軍人で自

分自身が病気で百人隊長は部下の病という違いはありますが、外国の軍人の病気がいやされたという点で共通している。偶然でしょうか。それで次の記事を見てみましょう。

イエスがナインという町で、一人息子を亡くしたやもめの女性に出会い、このやもめの一人息子をよみがえらせて母親に返されました。さきほどのエリシャの場合と比べてください。そっくりです。これは偶然ではありません。4章のことと、この7章はつながっています。このことから何が言えるか。今までは百人隊長の出来事とやもめの出来事は、別々のこととして扱われていたかもしれませんが、そうではない。これは切り離してはいけない。この二つを一つのこととして考えなければならぬことになる。そこで何が分かるか、これから詳しく見ていきます。

2 二人の違い

1) 百人隊長の場合

3節。「百人隊長はイエスのことを聞き、みもとにユダヤ人の長老たちを送って、自分のしもべを助けに来てくださいとお願いした。」

イエスが中風の人や手のなえた人を癒やしたといううわさは既に遠くの村や町にも伝わっていたのでしょ。百人隊長はそのうわさを聞き、死にかけているしもべを助けたいと思って、イエスにお願いしようと考えます。しかし自分は異邦人ですから、直接お願いすることは指揮官という立場上も難しい。そこで、親しくしている町の長老に相談したのでしょ。長老たちは百人隊長のことを深く信頼しておりましたので、「私たちが代わってイエスにお願いするから安心するように」と言って、イエスのところにやって来た。おそらくそんなことだったのでしょ。長老たちがイエスに事情を説明し、ではいっしょに行きましょうということになり、百人隊長のところへ向かいます。ところが向こうから、百人隊長の友人たちが来てこう伝言します。「主よ、わざわざ、ご足労くださるには及びません。あなた様を、私のような者の家の屋根の下にお入れする資格はありませんので。ですから、私自身があなた様のもとに伺うのも、ふさわしいとは思いませんでした。ただ、おことばを下さい。そうして私のしもべを癒やしてください。」

最初は自分のところへ来てくださいと言っていたのに、後になってからわざわざご足労に及びま

せんと言うのはなにか矛盾しているようです。おそらく百人隊長は、最初長老たちをイエスの所に送った後で、後悔したのかもしれませんが。しもべを助けたいという一心でそうしたけれど、でも良く考えたら自分にはそんな資格がない。そう考え直して、後から友人たちを使いに出した。そんな百人隊長の迷いにはありましたが、イエスのことばさえいただければしもべはいやされる、その信仰はゆるぎませんでした。そのことを知ったイエスは、「イスラエルのうちでも、これほどの信仰を見たことがありません」と驚きます。

2) やもめの場合

では、やもめの場合はどうでしょう。百人隊長の場合と違うところがいくつかあります。百人隊長の場合は、自分から積極的にイエスイヤしを求め、代理人を通してではありますが、いろいろなやりとりをしています。しかしやもめの場合はまったく違います。13, 14節。「主はその母親を見て深くあわれみ、『泣かなくてもよい』と言われた。そして近寄って棺に触れられると、担いでいた人たちは立ち止まった。イエスは言われた。『若者よ、あなたに言う。起きなさい。』」

母親は百人隊長のように積極的にイエスに働きかけているのでしょうか。いいえ、すべて受身です。

ではイエスがどうして母親がつながりを持つようになったかと言えば、にイエスが深くあわれんだことが最初のきっかけです。このことばは、「はらわたがちぎれるような悲しみに満ちて」という意味です。そんな思いに駆られながら、イエス自ら母親のところに駆け寄って「泣かなくてよい」と慰め、棺に触れて「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と語る。そうしたら死人が起き上がって、ものを言い始めました。

3 信仰

1) どちらが信仰深いのか

ここまでのことを簡単にまとめておきましょう。百人隊長は積極的にイエスに働きかけましたが、やもめは何もしないというか、息子を失った悲しみに暮れて何もできない状態の中でイエスの方から駆け寄ってこられるという、まったくさされるがままの受身で事が進んで行きました。

また百人隊長は、おことばを下さればそれで十分ですと、自分の口で自分の信仰を告白しています。しかし、やもめは信仰に関するどころか、何ひとつ語っていません。

ここで皆さんに質問をしてみたいと思います。百人隊長とやもめ、この二人のうちどちらが信仰深いと思うでしょうか？イエスは9節で、「わたしはイスラエルのうちでも、これほどの信仰を見たことがありません」と語っていますから、やっぱり百人隊長が信仰深いと言うかもしれませんが。では、やもめはどうなのでしょう。イエスはやもめの信仰については何も言っていないので、信仰はほどほどだった、というのでしょうか。

しかし最初にも申しました。百人隊長とやもめの記事は、決して別々の話しではなく、「信仰」というテーマでつながった一つのセットとして読むように書かれているのです。

2) どちらもすばらしい

このことを百円玉にたとえてみましょう。百円玉には表と裏がありますが、表だろうが裏だろうがどちらも百円玉。それと同じように、この二つの出来事は、まったく別のもののように見えるけれど、どちらも信仰ということを語っている。さきほど、この二人のうちのどちらが信仰深いかと聞きましたが、百円玉の表が裏よりもすぐれた百円玉だと言うようなものですから、実は意味のない質問だったのです。

何を言いたいのか。百人隊長の信仰も、やもめの信仰もどちらもすばらしい。こう言うと質問があるはずですが、やもめは何もしていないのにどうして信仰深いと言えるのか。

3) イエスを突き動かす

でもどうですか。子どもを亡くして悲しんでいるときに、私は神を信じていますからと言って、じつと静かに手を組みながら穏やかな表情で祈る。そんな親がいるのでしょうか。いない。誰だって泣き叫ぶはずですが、何もできません。では、何もできないので、その人には信仰がないということなのでしょうか。

こういうときは母親ばかりを見るのではなく、イエスを見るとすぐわかる。イエスは何をされましたか。13節をもう一度読みます。「主はその母親を見て深くあわれみ、『泣かなくてもよい』と言われた。」

イエスが母親のことを深くあわれんでくださいました。別の言い方をすれば、母親はイエスの心を深く揺り動かし、突き動かしているのです。その結果、イエスは積極的に動いて、息子をよみがえらせていく。ということは、母親は何もしていないのではない。イエスを動かすという大きなことをして

いる。イエスが動かされるほどの信仰があったことになる。

4) 悲しむ者に駆け寄られる主

意外でしょうか。でもこれは大きな希望ではないですか。百人隊長のように、静かに主のことばを待ち望むことも信仰ですが、そうでない信仰もある。主は言われました。「今泣いている人たちは幸いです。あなたがたは笑うようになるからです。」

夫に先立たれた母親が、たった一人の息子まで亡くす。こんな絶望的な話しはないでしょう。神はどこにおられるのか、と多くの人たちは叫びます。神は泣く者とともにおられます。悲しむ者のところへ駆け寄り、死んだ息子を生き返らせ、母親に戻してくださる。これも信仰なのです。

そのためにイエスはどのような犠牲を払われたのでしょうか。この方はご自分の故郷であるこの地上から追い出され、十字架に向かわれたのです。

何もできずに悲しむ者をも信仰者と呼んでくださる主とともに歩んでまいります。